

---

## ES 細胞研究助成差し止めに一時猶予

---

### Temporary reprieve for stem cells

MEREDITH WADMAN 2010年9月16日号 Vol. 467 (258-259)  
[www.nature.com/news/2010/100914/full/467258a.html](http://www.nature.com/news/2010/100914/full/467258a.html)

米国の ES 細胞研究助成の差し止め命令に一時猶予が出されたが、  
研究者は、日々変化する事態に振り回されている。

8月23日、連邦地裁の Royce Lamberth 判事が出した、米国立衛生研究所 (NIH) によるヒト ES 細胞研究助成の違法性を争う訴訟の審理中は助成を差し止める決定により、米国政府のヒト ES 細胞研究に対する助成金交付が突然中止となった。これに対し、米国司法省は命令取り消しを地裁と控訴裁判所

(高裁)に申請。地裁は申請を却下したが、ワシントン D.C. 連邦巡回控訴裁判所は9月9日、仮差し止め命令の執行を一時猶予する決定を下した。NIH の Francis Collins 所長は、「我々は、法廷での弁論が行われる数週間、人命を救うための重要なヒト ES 細胞研究を継続できるようにした今回の控訴裁判所の中間決定に満

足しています」と声明を発表した。この決定を受けて、NIHは、助成金交付を加速させている。一方、仮差し止め命令によって影響を受けた研究者は、自らの研究分野の存続を決する激しい法廷闘争の最新情勢に注視している。

ただし、この猶予期間は、早ければ9月20日に終わる。今回の訴訟では、Lamberth 判事が本案判決を下すまで政府の助成金を凍結すべきかどうかという争点に関して、控訴裁判所が、両当事者に弁論趣意書の提出を求めており、その期限が9月20日だからだ。

一方、この訴訟の原告であるボストン生物医学研究所（米国マサチューセッツ州ウォータータウン）の James Sherley と AVM バイオテクノロジー社（米国ワシントン州シアトル）の Theresa Deisher は、9月9日に略式判決の申立てを行い、Lamberth 判事は口頭弁論を開かずに迅速に判決を下すことを求めた。Sherley と Deisher は、ヒト ES 細胞研究に反対する宗教団体の支援を受けており、NIH の助成金交付方針によって自らの成体幹細胞関連研究が脅威にさらされていると主張している。

9月9日の控訴裁判所決定から数時間のうちに、NIH の幹部は、助成金交付を早期に実施し、助成金申請の審査手続を迅速化し、2010 会計年度（2009 年 10 月 1 日～2010 年 9 月 30 日）の政府予算で未払いとなっている、総額 5400 万ドル（約 46 億円）の複数年助成金 24 件の支払いを勧告された。そして同日午後、NIH の管理官が、NIH キャンパス内外で NIH の助成金を受け取っている研究者は、直ちに実験を再開でき、助成金交付と審査も速やかに開始される旨の電子メールをスタッフに送った。

「NIH が迅速に行動してくれたことに満足しています」。ジョーンズホプキンス大学細胞工学研究所（米国メリーランド州ボルティモア）の幹細胞研究者 Linzhao Cheng は話す。Cheng は、ES 細胞研究に対する大規模な NIH の助成を申請し、審査でも非常に高い評価を得

著作権等の理由により画像を掲載することができません。

ワシントン D.C. 連邦巡回控訴裁判所は 9 月 28 日、ヒト ES 細胞研究への連邦政府助成金を巡る訴訟に司法判断が出されるまで、政府の助成は継続できるという決定を下した。同裁判所は、同時にその訴訟の審理の迅速化も勧告。今回の決定で当面の間の研究は保証されたが、いずれにしても、米国のヒト ES 細胞研究の先行きは不透明である。

ていたが、仮差し止め命令により、人材雇用、研究材料購入、計画策定をすべて中止していた。当初、助成金の交付は 9 月 1 日のはずだった。しかし彼は、たとえ助成金を今週受け取っても、ゴーサインが出たり取り消されたりするような状況下では研究はできないと話している。

助成金審査にも影響が出ている、と Cheng はいう。8 月終わり、Cheng が 10 月からの助成金検討部門への参加を準備していたところ、ヒト ES 細胞を用いるプロジェクトに対する助成金については無視するように、という NIH からの指示があった。9 月 10 日現在、この指示は変更されていない。検討部門の会合は 10 月 12～13 日に予定されており、今からヒト ES 細胞の研究提案書をていねいに読むことは難しい、と彼は話す。

Cheng は、メリーランド州からも研究助成金を受け取っているが、ほかの研究者の多くは、そういった助成金を得るチャンスはほとんどない。ミネソタ大学幹細胞研究所（米国ミネアポリス）の Meri Firpo 助教は、連邦政府助成金の見通しをもっと確実になるまでは、長期間、研究を休止することにした。現在、彼女は、10 月が提出期限となっている NIH 助成金申請書からヒト ES 細胞の部

分を削除して、書き直している。また、連邦政府助成金を受け取っている学生のプロジェクトを再構成して、問題となるヒト細胞を切り離している。「問題は解決していませんが、研究を進めます」と Firpo は話す。

こうした不確実性は、NIH キャンパスで活動する幹細胞研究者の間にも広がっている。残された時間内に貴重な細胞株の増殖を急ぐ研究者がいる一方、胚を用いない人工多能性幹細胞（iPS 細胞）に研究対象を切り替える研究者もいる。NIH キャンパスの研究者の 1 人は、こう話す。「今の時点では、リスクを冒して大型実験を始めたいと思う者はいません。数週間後には、ヒト ES 細胞を使った実験が長期中断する事態に発展する可能性があるのですから」。

法廷闘争が続く中、ヒト ES 細胞研究の推進派は、NIH がヒト ES 細胞研究に助成金を交付することを明確に合法化する法案の可決を議会に強く求めている。Lamberth 判事は、自らの仮差し止め命令に対する取り消し申請は却下したが、この却下決定には「議会が、この法律を改正することは全く自由だ」と記されている。

■  
(翻訳：菊川要)